

山本 章造

灰褐色をした泥濁りの海はリッチな海でした (ガイアナ共和国報告)



眼下には深い緑におおわれた熱帯雨林が延々と広がり、それを分断するように茶褐色をした大河がとうとうとしかも静かに流れています。ニューヨーク乗継で32時間、日本から最も遠い国ガイアナ共和国の入り口でした。

ガイアナへ行きませんかとの突然のお誘いに、淡水魚の宝庫アマゾン流域へ行けるとダボハゼのごとく後先を考えずに喰いつきました。今年の2月から6月まで4ヵ月間余り、発展途上国ガイアナの魚類養殖業を振興するための技術支援に訪れました。

赤道直下のこの国は、カラフルな熱帯魚が群れ泳ぐブルーに透きとおったハワイのような海であろうと想像していましたが、実際には灰褐色をした驚くばかりの濁水の海でした。防潮堤



灰褐色の泥の海でエビ漁をする人々

(sea wall) に立って見わたすと、泥干潟がはるかかなたまで広がり、灰褐色の細かい砂泥土が堆積しています。海岸にはヤシの実や流木それにプラスチックのごみなどが打ち寄せられています。ところが、海藻や貝殻は全く見当たりません。この付近に海藻は生えず、貝も棲んでいないのでしょうか。海藻の間を小魚が泳ぎまわる透明な日本の海を見慣れている私には全く死んだ海に見えました。

ところが、地元の人はこちらを **dirty** ではなく **rich** と呼んでいるのです。濁っていてもリッチなのです。なるほど、干潟域で地曳網漁をしている人の漁獲物をのぞいて見ると、本命のエビ(地元で **sea bob** と呼ぶ。)に加えて、ニベ、フグ、カレイ、ナマズの仲間など多種類の幼魚が大量に混獲されています。本格的な漁師

さんはすこし沖合に定置網や刺し網を設置して、ニベ、アカメ、ボラやナマズの仲間(いずれも日本の魚とは種類が違います。)など多種多様の魚を獲っています。海にナマズが棲んでいるのです。しかも種類が多く、1mにもなる黄金色をしたナマズもいます。防潮堤から観ているだけでは想像もできないほどたくさんの魚やエビがこの灰褐色をした海に棲んでいるのを知った時、長らく魚の調査に携わってきた私には、どうして?と全くの驚きでした。

どうしてこんなにたくさんの魚やエビが棲んでいるのでしょうか。実は、この灰褐色をした泥濁りの海は多くの生き物をはぐくむ栄養豊かなリッチな海だったのです。背後に広がる広大な熱帯雨林に蓄えられたミネラルや有機物などの栄養物が、豊かに流れる大河を通じて海に運ばれ、沿岸域に発達したマングローブ林を育て、多くの生き物をはぐくむ豊饒の海を生み出していたのです。

東南アジアやブラジルの熱帯雨林の破壊はTVドキュメンタリーなどでよく知られているところですが、ここガイアナでは、森、川、

山本 章造 氏

1945年京都市生まれ
元岡山県水産試験場長
専門:魚類の増養殖(京大農博)、クレイジーなサイクリスト
(財)おかやま環境ネットワーク理事
岡山淡水魚研究会理事

海の連環が今もなお健全に維持され、自然の循環が機能しているのです。自然の威力を目の当たりにしました。

ところが、このリッチな海についてはほとんど調査がされておらず、データもありません。日本人の私に言わせれば、すぐにでも水質や生物調査を行って実態を把握し、豊かさを持続する方策を立てる必要があると短絡的に考えてしまいます。ところがそう簡単にはいかないのがこの国の難しいところでしょうか。

ガイアナ共和国は、1966年にイギリスの統治から独立した人口が76.2万人の小さな若い国です。南アメリカ大陸の北東部に位置し、カリブ海諸国と経済的、文化的交流が深く、人々は陽気さと明るさに満ち溢れ、夜遅くまでカリプソやレゲエなどのジャマイカ音楽を楽しんでいます。

中南米の国々の中で唯一英語が公用語の国ですから、私の日本語英語でもなんとなくかなと軽く考えていましたが、ガイアナ英語を話す現地の人々とはコミュニケーションを十分にはかれず、仕事どころか日常生活にも困惑することがたびたびありました。

首都ジョージタウンはどこの国ともさほど変わらない、生活物資のあふれた何不自由のない都市です。オランダの統治時代に築造された灌漑用水路が縦横に走

り、それに沿って欧風住宅が並ぶきれいな町でした。また、歴史ある教会の周りにも近代的なビルが各地で建築中であり、この国の若さと活力を感じました。



魚市場の陽気な人々、カメラを向けるとほとんどがポーズをとってくれます

街中には市場や商店、露店が並んで人々があふれ、近年急増した車があちらこちらで交通渋滞を引き起こしています。信号が少ないうえに自動車最優先ですから、歩行者は走る車の合間を狙い小走りで道路を横断せねばなりません。日本車が圧倒的に多く、遠い異国のこの国で唯一日本を感じさせてくれました。

一方、郊外に足を踏み出すと道路はほとんどが未舗装、道端ではヤギが草を食み、牛が寝そべっています。周囲はプランテーションの名残を留める大規模なサトウキビ畑が広がり、製糖業がこの国の基幹産業の一つになっています。さらに、その奥には国土の95%以上を占める広大な熱帯雨林が続き、豊かな自然を体感できます。

ところが、ガイアナでも

首都近郊ではマングローブ林が減少傾向にあり、さらに奥地の山間部や未開発地域にはインドや中国などの新たな外国資本による開発の波が押し寄せています。広大な熱帯雨林に眠る鉱物資源や生物資源が狙いででしょうか。

熱帯雨林の破壊は沿岸域への栄養物の供給を止め、マングローブ林を消失させ、生物資源の減少につながることを今までの多くの事例が示しています。それはグローバルな気候変動を引き起こし、生態系をかく乱して種の多様性を減衰させ、私たちの生活環境を破壊します。発展途上のこの国で、自然環境の破壊の危機とそれを守ることの大切さを学んできました。これは遠い国の話ではありません。

貧しいながらもジャマイカ音楽を歌い瞳の輝いた陽気なガイアナの人々と接してきた私は、帰国後成田からのJR車内で、疲れ切って目をつむり青白く憂鬱な顔をしたサラリーマンの姿を見て、果たしてどちらが幸せなのかと考え込みました。



Republic dayには「民族の尊厳」などのスローガンを掲げてこの国最大のパレードがありました